「平成の大造営」で改修された亀山八幡宮

亀山八幡宮で完工式

下関

外壁修復など終わる

下関市の亀山八幡宮（竹中恒彦宮司）で20日、外壁修復などが終わり、完工式が開かれた。昨年7月から続いていた「平成の大造営」と呼ばれる大規模な修復・改修工事で、関係者ら128人が集まり、完成を祝った。

亀山八幡宮は859（貞観元）年に創建された。室町時代から江戸時代まで大内氏や毛利氏の保護を受け、1506（永正3）年には当時の大内藩主・大内義興が社殿や楼門を修復したほか、1690（元禄3）年には毛利藩主・毛利綱元が能舞台を寄進している。太平洋戦争末期の1945（昭和20）年に空襲で全焼したが、翌46年に再建された。

平成の大造営は昨年7月に始まり、全国の約3500人から寄付が集まった。総事業費は約1億2000万円で、工事は社殿屋根の銅板ふき替えや外壁の改修、石畳の新設など多岐にわたっている。

巫女による舞など奉納

完工式では、竹中宮司による祝詞の後、巫女による舞の奉納などが行われた。その後の記念式典で竹中宮司が神社の長い歴史の中で修復や整備が繰り返されてきたことに触れ「このように立派な造営ができ、次の時代にバトンタッチできることを喜んでいます」と語った。

続いて総代会代表として出席した林芳正農林水産相が「神社の行事をより一層盛り上げていきたい」とあいさつし、中尾友昭市長は「亀山神社は市民の心のよりどころ」と強調し、修復・整備が終わったことへの祝辞を述べた。

【反田昌平】

社殿で平和を祈る神楽「浦安の舞」が奉納された